〔B 年〕聖霊降臨節第７主日(2023 年７月９日)

【旧約聖書日課】エレミヤ書　38章1～13節

1マタンの子シェファトヤ、パシュフルの子ゲダ
ルヤ、シェレムヤの子ユカル、マルキヤの子パシ
ュフルは、エレミヤがすべての民に次のように語
っているのを聞いた。
2「主はこう言われる。この都にとどまる者は、
剣、飢饉、疫病で死ぬ。しかし、出てカルデア軍
に投降する者は生き残る。命だけは助かって生き
残る。3主はこう言われる。この都は必ずバビロン
の王の軍隊の手に落ち、占領される。」
4役人たちは王に言った。
「どうか、この男を死刑にしてください。あの
ようなことを言いふらして、この都に残った兵士
と民衆の士気を挫いています。この民のために平
和を願わず、むしろ災いを望んでいるのです。」
5ゼデキヤ王は答えた。
「あの男のことはお前たちに任せる。王であっ
ても、お前たちの意に反しては何もできないのだ
から。」
6そこで、役人たちはエレミヤを捕らえ、監視の
庭にある王子マルキヤの水溜めへ綱でつり降ろし
た。水溜めには水がなく泥がたまっていたので、
エレミヤは泥の中に沈んだ。
7宮廷にいたクシュ人の宦官エベド・メレクは、
エレミヤが水溜めに投げ込まれたことを聞いた。
そのとき、王はベニヤミン門の広場に座していた。
8エベド・メレクは宮廷を出て王に訴えた。
9「王様、この人々は、預言者エレミヤにありと
あらゆるひどいことをしています。彼を水溜めに
投げ込みました。エレミヤはそこで飢えて死んで
しまいます。もう都にはパンがなくなりましたか
ら。」
10王はクシュ人エベド・メレクに、「ここから三
十人の者を連れて行き、預言者エレミヤが死なな
いうちに、水溜めから引き上げるがよい」と命じ
た。11エベド・メレクはその人々を連れて宮廷に帰
り、倉庫の下から古着やぼろ切れを取って来て、
それを綱で水溜めの中のエレミヤにつり降ろした。
12クシュ人エベド・メレクはエレミヤに言った。
「古着とぼろ切れを脇の下にはさんで、綱にあて
がいなさい。」エレミヤはそのとおりにした。13そ
こで、彼らはエレミヤを水溜めから綱で引き上げ
た。そして、エレミヤは監視の庭に留めて置かれ
た。

【使徒書日課】使徒言行録　20章7～12節

7週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために
集まっていると、パウロは翌日出発する予定で
人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた。8わ
たしたちが集まっていた階上の部屋には、たくさ
んのともし火がついていた。9エウティコという青
年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々
と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三
階から下に落ちてしまった。起こしてみると、も
う死んでいた。10パウロは降りて行き、彼の上にか
がみ込み、抱きかかえて言った。「騒ぐな。まだ
生きている。」11そして、また上に行って、パンを
裂いて食べ、夜明けまで長い間話し続けてから出
発した。12人々は生き返った青年を連れて帰り、大
いに慰められた。

【福音書日課】ルカによる福音書　7章11～17節

11それから間もなく、イエスはナインという町
に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であっ
た。12イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、
ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出される
ところだった。その母親はやもめであって、町の
人が大勢そばに付き添っていた。13主はこの母親
を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」
と言われた。14そして、近づいて棺に手を触れられ
ると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエス
は、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言
われた。15すると、死人は起き上がってものを言い
始めた。イエスは息子をその母親にお返しになっ
た。16人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預
言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神は
その民を心にかけてくださった」と言った。17イエ
スについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地
方一帯に広まった。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

エレミヤ書　38章1～13節

1マタンの子シェファトヤ、パシュフルの子ゲ
ダルヤ、シェレムヤの子ユカル、マルキヤの子
パシュフルは、エレミヤがすべての民に次のよ
うに語っている言葉を聞いた。
2「主はこう言われる。この都にとどまる者は、
剣、飢饉、疫病で死ぬ。しかし、カルデア人の
もとへ出て行く者は生き延びる。その命は自分
の戦利品となって、生き延びる。
3主はこう言われる。この都は必ずバビロンの
王の軍隊の手に渡され、彼はこれを占領する。」
4高官たちは王に言った。「どうか、この男を死
刑にしてください。あのようなことを人々に語
り、この都に残っている戦士とすべての民の士
気を挫いているからです。この民のために平和
を求めず、むしろ災いを求めているのです。」
5ゼデキヤ王は答えた。「あの男はお前たちに任
せる。王であっても、お前たちの意に反しては
何もできないのだから。」6そこで、彼らはエレ
ミヤを捕らえ、監視の庭にある王子マルキヤの
水溜めへ放り込んだ。彼らはエレミヤを綱でつ
り降ろしたが、水溜めには水がなく泥が溜まっ
ていたので、エレミヤは泥の中に沈んだ。
7王宮にいたクシュ人の宦官エベド・メレクは、
エレミヤが水溜めに入れられたことを聞いた。
王はベニヤミン門に座していた。8エベド・メレ
クは王宮から出て、王に話した。9「王様、この
人々は、預言者エレミヤにありとあらゆるひど
いことをしています。彼を水溜めに放り込みま
した。エレミヤはそこで飢えて死んでしまいま
す。もう都にはパンがなくなりましたから。」
10王はクシュ人エベド・メレクに命じた。「こ
こから三十人の者を連れて行き、預言者エレミ
ヤが死なないうちに、水溜めから引き上げよ。」
11エベド・メレクはその人々を連れて王宮の倉
の下に行き、そこから古着やぼろ切れを取り、
それを綱で水溜めの中にいるエレミヤのところ
につり降ろした。12クシュ人エベド・メレクはエ
レミヤに言った。「さあ、古着とぼろ切れを脇
の下にはさんで、綱にあてがいなさい。」エレ
ミヤはそのとおりにした。13そこで、彼らはエレ
ミヤを綱で引っ張って、水溜から引き上げた。
そして、エレミヤは監視の庭にとどまった。

使徒言行録　20章7～12節

7週の初めの日、私たちがパンを裂くために集
まっていると、パウロは翌日出発する予定で
人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた。
8私たちが集まっていた階上の部屋には、たくさ
んの灯がついていた。9エウティコという青年が、
窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続
いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階
から下に落ちてしまった。起こしてみると、も
う死んでいた。10パウロは降りて行き、彼の上に
かがみ込み、抱きかかえて言った。「騒がなく
てよい。まだ生きている。」11そして、また上に
行って、パンを裂いて食べ、夜明けまで長い間
話し続けてから出発した。12人々は生き返った
若者を連れて帰り、大いに慰められた。

ルカによる福音書　7章11～17節

11それから間もなく、イエスはナインという
町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒で
あった。12イエスが町の門に近づかれると、ちょ
うど、ある母親の一人息子が死んで、担ぎ出さ
れるところだった。母親はやもめであって、町
の人が大勢そばに付き添っていた。13主はこの
母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくとも
よい」と言われた。14そして、近づいて棺に触れ
られると、担いでいる人たちは立ち止まった。
イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさ
い」と言われた。15すると、死人は起き上がって
ものを言い始めた。イエスは息子を母親にお渡
しになった。16人々は皆恐れを抱き、「偉大な預
言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神
はその民を顧みてくださった」と言って、神を
崇めた。17イエスについてのこの話は、ユダヤ全
土と周りの地方一帯に広まった。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・7 月 9 日「聖霊降臨節第 7 主日」の日課主題は「生命の回復」。
・旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から、預言者エレミヤが対立する役人たちによって水溜に投げ込まれた逸話を伝える箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、パウロのトロアス滞在に際しての青年エウティコの逸話箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「ナインのやもめ」の逸話箇所。

旧約日課（エレミヤ 38 章より）

・「エレミヤ書」は、ユダヤ教正典（ヘブライ語聖書）「後の預言者」の第二におかれた預言書。南王国末期に宮廷預言者として活動した預言者エレミヤの預言と活動逸話が伝えられている。ヘブライ語正典の本預言書は、他の預言書にみられるような時代順の構成が乱れているほか、ギリシア語訳版（七十人訳聖書）や死海文書版に見られない箇所が多数みられる。通説では、ギリシア語訳版や死海文書版がより古い原典本文を反映しているのに対して、ヘブライ語正典版（「マソラ本文」と呼ばれる）は大幅に加筆されたものと考えられている。
・「預言者エレミヤ」は、地方聖所出身の祭司でありながら、南王国ヨシヤ王の治世 13 年から宮廷預言者として仕え（1:1）、王国滅亡までエルサレムで活動した後、エジプト亡命組によってエジプトに連行され（43 章）、当地で生涯を終えたと考えられている。ヨシヤ王（在位＝前 640~609 年ごろ）は、8 歳で即位し、治世 18 年に改革に着手したと伝えられているが（王下 22 章）、この改革は、おもに北部に存在した地方聖所を廃止し、中央聖所である王立エルサレム神殿に祭儀を集中することを柱としたものであったと伝えられている（王下 23 章）。実際には、長く宗主国として覇権を握っていたアッシリアの衰退に乗じて、王国の領域拡大と中央集権化を進めるための一環として、地方権力の拠点となりうる地方聖所および地方祭司集団をエルサレム神殿祭司集団を中心とした中央聖所体制に組み込んでいく意図でなされた改革であったと考えられる。その結果、エレミヤのような地方聖所に属する地方祭司出身者が宮廷預言者に招集されることが起こったのだろう。このように、「ヨシヤ王の改革」と呼ばれるものは、宮廷と神殿が一体となって推し進めたものであり、政祭一致体制を強め、預言者をはじめとする祭司集団の政治的役割を拡大するものであったと考えられる。さらに、ヨシヤ王は反アッシリアの外交姿勢を明確にし、新興のバビロニア・メディア連合側に付いたため、この改革の担い手となった役人・祭司らは、親バビロニア派を形成した。一方、ヨシヤ王が対エジプト戦役で戦死し、エジプト傀儡の王が立てられると、宮廷内には親エジプト派が形成され、両派は王国滅亡まで対立を続けることとなったのである。
・日課箇所は、第一次バビロン捕囚（前 598 年ごろ）でヨヤキン王と側近の王族・貴族や祭司らがバビロンに移住した後、なおエルサレムに残って親バビロニア派として活動した集団の一人であった預言者エレミヤが、宮廷に強い影響力を持つ親エジプト派との権力闘争に巻き込まれ、命を狙われた出来事を伝えている。登場するゼデキヤ王は、ヨヤキン王が退位させられてバビロンに幽閉させられることになった後、後継王として即位し、王国滅亡まで 11 年間、在位した。
・この逸話の中でエレミヤの危機を救った「クシュ人の宦官エベド・メレク」については、人物像がほとんど知られていない。「エベド・メレク」の名は「王の僕」の意なので、実際は固有名ではなく職名なのだろう。「クシュ人」は、後に「エチオピア人」を構成する主要民族。「使徒言行録」8 章に伝えられる「エチオピア人の宦官」は、この「クシュ人の宦官エベド・メレク」をモデルにしているとも考えられる。ユダ王国に限らず、外国人を助言者として宮廷に迎えることは、しばしば行われてきたことである。しかし、この人物に関しては、「エレミヤ書」が再度取り上げ、エルサレム陥落時に殺されることはないという預言を伝えている（39:16 以下）。エチオピア（クシュ）には、古くからダビデ王家（ソロモン王）との縁戚関係を伝える伝承がある

使徒書日課（使徒言行録 20 章より）

・「使徒言行録」の全般的特徴については、前回までの資料を参照。
・日課箇所は、パウロが二年に及んだとされるエフェソでの宣教活動を打ち切り、マケドニアおよびギリシア（アカイア？）を巡った後、最終的にエルサレムを訪問する目的でシリア（アンティオキア？）に向かう途上、トロアスの港に滞在した際の逸話として伝えられている。「トロアス」は、エーゲ海北東部に位置し、パウロらがマケドニア宣教に赴く際にも通過した地として描かれており（16:8 以下参照）、当時のエーゲ海航行における主要な中継地の一つであったと考えられるが、歴史上の詳細は知られていない。「ルカ文書」の著者（ルカ？）がこの地に深く関与していた（彼の故郷？）と推察する者もいる。
・登場人物の「青年エウティコ」については、何も知られていない。
・「週の初めの日」や「パンを裂く」などは、この場面が教会の「日曜日の集会」であったことを示唆している。「たくさんのともし火（ランパス）」は、文字通り照明を付けていたことを意味するが、「マタイ」25:1 以下の「十人のおとめのたとえ」で「ともし火（ランパス）」の油の用意ということが描かれているように、信仰心や篤信の姿勢を示唆しているとも考えられ、そこに大勢の熱心な信者らが集まっていたことを象徴的に描いていると考えることもできる。そうであればこそ、「眠りこけて」しまい「下に落ちて…死んで」しまったという青年について、なお命の希望が語られうるのだろう。

・10 節「まだ生きている」の直訳は、「彼の息(プシュケ)は、彼の中にある」。ギリシア語「プシュケ」の原義は「息」であるが、転じて「生命」、「心」、「(生命の根源としての)霊魂」などの意味で用いられる。ギリシア思想の「霊肉二元論」や「霊魂不滅説」の場合の「霊」や「霊魂」は、いずれも「プシュケ」である。
・12 節「生き返った青年」の直訳は、「生きている(ザオー)僕(パイス)」。8 節「青年(ネアニアス)」は「若者／新人」の意であるが、「パイス(僕)」は、「使徒言行録」ではもっぱら「僕イエス」という表現で用いられている(3:13,26、4:25,27,30)。「ルカ福音書」は、「ヤイロの娘」の逸話の中で、娘が死んで生き返る場面でのみ「娘」を指して「パイス」の語を充てている(ルカ 8:51,54)。

福音書日課(ルカ 7 章より)

・日課箇所は、「ナインのやもめの死んだ息子を生き返らせた逸話」として知られるが、「ルカ」だけが伝えている。この逸話物語は、16 節「大預言者が我々の間に現れた」と人々に語らせているように、旧約の代表的預言者エリヤが「サレプタのやもめの死んだ息子を生き返らせた逸話」(王上 17 章)を一つのモデルにして構成されていると考えられる。なお、エリヤの後継者エリシャにも「シュネムの婦人の死んだ息子を生き返らせた逸話」(王下 4:8 以下)があるが、この婦人は「やもめ」ではない。
・「ナイン」は、「ナザレ」から数キロの小村とされるが、詳細は不明。厳密に考えれば、この小村は行政区分上「ガリラヤ州」に属す地域にあったと考えられるが、17 節にもあるように、「ルカ福音書」は、「ガリラヤ」を「ユダヤ」と厳密に区別していない。
・ユダヤ人の習慣では、死者の埋葬に際して、人々が「棺」を担いで葬送行列を行い、途上、何度か立ち止まって惜別することとされてきた。12 節「棺」と訳されているのは、「死んだ者＝遺体」を意味する語。14 節「棺(ソロス)」は遺体を乗せる「棺架(＝担架？)」を意味する語。
・13 節「もう泣かなくともよい(メー・クライエ)」は、「ヤイロの娘」の逸話物語中で「泣くな(メー・クライエテ)」(8:52)と告げられた言葉と同じ(人称単複が異なるので語尾が変化している)。
・14 節「若者よ、あなたに言う、起きなさい」の直訳は、「若者よ、わたしはあなたに言う、あなたは起き上がらせられよ」。類似した呼びかけを伝える「ヤイロの娘の逸話」では、8:54「娘よ、起きなさい」＝「僕よ、あなたは起き上がれ」と能動形で起き上がるように呼びかけられているが、日課箇所の若者は、受動形で起き上がらせられるように呼びかけられている。「中風の人の癒しの逸話」(5:24)や「手の萎えた人の癒しの逸話」(6:8)における呼びかけも能動形であり、日課箇所は例外的な表現となっている。しかし、主イエスの復活については受動形での表現が常套(使徒 2:24 等)。

来週の誕生日 (7 月 9 日～15 日)

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-1 番「主イエスよ、われらに」は、I 341 番の歌詞を原曲に戻し、編曲を変更。作詞者 F・ヴィルヘルムⅡ世はザクセン＝ワイマール公国の領主で音楽家。作曲者不詳だが、チェコの宗教改革者フス(1369～1415 年)に遡るとも言われる。
・21-60 番「どんなにちいさいことりでも」(＝こ58)は、は、1966 年版『こどもさんびか』の増補版として 1983 年に出版された『こどもさんびか 2』のために作詞作曲された。作詞は、幼児教育とその指導者育成に携わった菅千代。作曲は、作曲家・広瀬量平。
・21-406 番「聖霊ゆたかに」の作詞は、15 番「みことばにより」の作者 J・モンゴメリーで、原歌詞は 6 節まである。曲は、20 世紀前半に活躍した作曲家 P・C・バックによってラテン語聖歌のために作られたものの転用。

21－1「主イエスよ、われらに」

Herr Jesu Christ, dich zu uns Wend

1. Herr Jesu Christ! dich zu uns wend, / Dein' Heil'gen Geist du zu uns send: / Mit Hilf' und Gnad', er uns regier / Und uns den Weg zur Wahrheit führ.
2. Thu auf den Mund zum Lobe dein, / Bereit das Herz zur Andacht fein, / Den Glauben mehr, stärk den Verstand, / Daß uns dein Nam werd wohl bekannt.
3. Bis wir singen mit Gottes Heer: / Heilig, heilig ist Gott, der Herr, / Und schauen dich von Angesicht / In ew'ger Freud' und sel'gem Licht.
4. Ehr sei dem Vater und dem Sohn, / Dem heil'gen Geist in Einem Thron, / Der heiligen Dreieinigkeit / Sie Lob und Preis in Ewigkeit.

讃美歌 21－406「聖霊ゆたかに」

O Spirit of the Living God

1. O Spirit of the living God, / In all Thy plenitude of grace, / Where'er the foot of man hath trod, / Descend on our apostate race.
2. Give tongues of fire and hearts of love / To preach the reconciling Word, / Give power and unction from above, / Whene'er the joyful sound is heard.
3. Be darkness, at Thy coming, light; / Confusion, order in Thy path; / Souls without strength inspire with might; / Bid mercy triumph over wrath.
4. O Spirit of the Lord, prepare / All the round earth her God to meet; / Breathe Thou abroad like morning air, / Till hearts of stone begin to beat.
5. Baptize the nations; far and nigh / The triumphs of the cross record; / The Name of Jesus glorify, / Till every kindred call Him Lord.
6. God from eternity hath willed / All flesh shall His salvation see: / So be the Father's love fulfilled, / The Savior's sufferings crowned through Thee.